

大宰府と観世音寺礎石について

鏡山, 猛

<https://doi.org/10.15017/2244041>

出版情報 : 史淵. 101, pp.1-12, 1969-11-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

大宰府と観世音寺礎石について

鏡山 猛

はしがき

大宰府の遺跡は、政庁趾はじめ、官衙、寺院趾などに礎石が残されている。都府楼趾の手のこんだ礎石をとりあぐれば、国内に例をみないような精巧なものとして宣伝されてきた。しかし同じ政庁趾でも、東西殿堂や門趾に残された礎石には、正円でない柱座のくり出しもあって精粗一様でない。昭和四十三年の発掘調査が行われるようになって、新しい知見が加わり、礎石の問題にも再検討の機会がおとずれた。発掘調査の結果を俟って考うべきことがあるが、取あえず二三の氣づいたことを覚書きにしておこう。旧稿には正式の調査報告書の刊行によって改めて考うべき諸点があることを思い、ここでは問題の提起に止まることが多い。

観世音寺は大宰府政庁とならんで、府内の顕著な遺跡である。寺は現在に生命をつないでいるし、近世の建造とはいへ、金堂、講堂のあとに建物がある。ただ塔だけは巨大な心礎だけが人目をひいているが囲りは荒廢して廢墟のたたずまいである。私は昭和二十二年の初め頃、考古学研究室の学生諸君の実習をかねて塔残礎の実測を行った。実測してみるとかねて予想していたように、幾つかの礎石は塔の平面復元をする場合の資料となることを知った。ここに提示する観世音寺五重塔平面の復元案は右の調査結果である。

注(一) 第三図の実測製図には下記考古学研究室の諸君の手を煩わした。真野 和夫 藤口 健二 徳永 博行

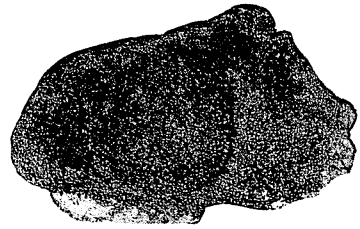
一、政庁趾礎石柱座について

近年問題となっていた大宰府遺跡の調査と保存の機運が熟して、ようやく昨年から福岡県で正式に発掘調査に着手することになった。昨年度は大宰府政庁趾の南門、中門趾に限られる状態であったが、地表では予想されなかった成果が得られた。この調査事業発掘に先だって私はこれまでの調査と研究をまとめ「大宰府都城の研究」¹⁾を刊行した。大宰府の遺跡について論及することは多いが、第一に問題としたのは大宰府政庁の遺跡であった。この遺跡は俗に都府楼と呼びならわし、その呼名の起源が「都府楼わずかに見る瓦の色」の菅公詩篇の句に由来していることも誤りないであろう。昨年度、中門と南門の発掘調査については、昭和四十三年度の概報が県教育委員会より発表されている。²⁾私も現場をみて、地表に露出していた礎石が、当初考えていたような七世紀のものでなく、平安時代に降ったものであることが了解された。そこで気になっていた中門礎石が正円でない柱座のことをふりかえてみた。正円でないことは肉眼でも観察されるが、昭和四十二年全礎石の垂直写真を撮る際に気がついていた。しかし、当時その意味するものがわからなかった。これ等の柱座は少し位歪みがあっても、柱根を点検すればともかく、外観上はさしてぶざまというほどのことはない。しかし奈良時代の工作を見れば、やはり柱座はそれなりに正円に設計し、彫刻している筈である。歪みは故意の施工でなく、両脚器を用いず、目検分の工作であるとしたら、それは石工の精神的ゆるみに止まらず、造形意慾の衰退を推察することが出来るかも知れない。礎石使用の年代は大宰府の最終段階を示すものであっても、礎石の製作は前代にさかのぼり得る可能性はある。それがためには現礎石下に新に発見された礎石と対比せねばならない。³⁾

ところで東西両殿に於ては、ほとんどの礎石柱座が正円でないことが注意された。このことは中門の礎石と関連して、設置の年代と彫製の年代に関して問題をなげかける。大宰府の発掘調査が東西両殿の地に及ぶ時を待って、疑問が解決される日を期待する。



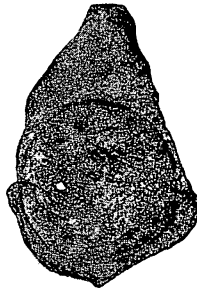
No. 1 正殿東南隅
小礎石



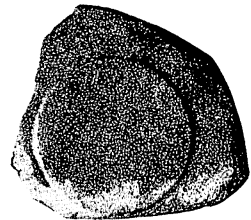
No. 2 II-1 東殿



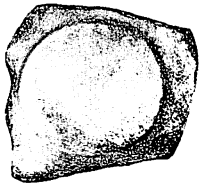
No. 3 西殿 I-3



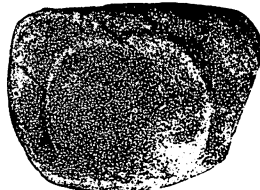
No. 4 西殿 IV-6



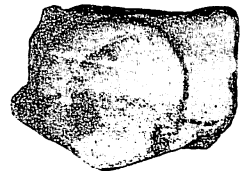
No. 5 東殿 V-4



No. 6 中門 I-3



No. 7 中門 I-2



No. 8 中門 I-4

いま一つ疑問を加えるならば、正殿前面礎石列の左右両端に小形礎石が一對あることである。これも築地の基礎に用いられたものか、廻廊用のものかという推測をしておいたが、柱座が小さいので如何かと思っていた。今次の調査で中門に於て廻廊と推定される礎石が認知されている。それは中門の東端に位置しているが、中門の配列位置に並んでいないので、原位置を移動した門礎と考えていたものである。この礎石は門礎の大きさや柱座の形状など門礎と大差のないものであるから、小礎石はこの礎石と同列には論ぜられないであろう。しかし発掘調査のあとが教えるように、都府楼建築の歴史は政庁創建以来数百年の歳月が地中に印されている。発掘調査の手が正殿に及ぶ日は早急に来そうにもないが、小形礎石の性格も解明したいことの一つである。

注（1） 風間書房 鏡山猛「大宰府都城の研究」 昭和四十三年五月刊。

（2） 福岡県教育委員会「大宰府史跡」昭和四十三年度調査概要 昭和四十四年三月刊。

（3） 下層礎石についてはいずれ本報告書が出ると思うが、正門に近い柱座のように観察された。

二、観世音寺塔婆の礎石

観世音寺の塔の残礎については拙著「大宰府都城の研究」に簡単に言及し、復元の私案では一層目は中の間七尺、脇の間六尺という概数を示すに止めている。いま少し記述を補う必要を感じたので、大宰府政庁の礎石補考に準じて、計測の結果を示しておこう。

観世音寺の塔婆は延喜五年の同寺資財帳には次のような記述がある。

瓦葺五重塔壹基。戸肆具、鐸四口

无矣、^(無)風朽損十四枝

管後今校二口无、風朽十七枝、无檀高連子間无、垂聚一果、傾辰已八寸、

貞観三年小破、於角下堤廿条瓦落、長各一丈、層別四条、垂聚一果、傾倚三寸許、

右遭貞観十三年八月十二日大風中破

今校修理全

瓦葺の五重層塔は貞観十三年大風にあつてはいたんだが、その後修理が出来て、一応の旧態に復した。延喜の頃、風鐸がなくなつたりして傷んではいるが、康平七年（一〇六四年）の火災によつて消失した。¹

この時同時に焼失した講堂は、治暦二年（一〇六六年）に再建落成したが、塔の再建計画は遅れた。康和元年（一〇九年）大江匡房が権帥として下向、この年五重塔再興に着手したようである。経費を九州諸国と寺家に割りあて、太政官はその事業を官符を以て督促している。しかしその後数年間度々の催促を経て、土木の功ならず、そのうちに康治二年（一一四三年）寺は再び火災にあい金堂廻廊などを焼亡した。その後は金堂の再興に主力がそがれ、塔の再興はいよいよ困難になった。久安四年（一一五〇年）の堂塔損毛勘文には、

一、五重塔 一基 以往焼失無実

とあつて、罹災後の復興は成就していない。匡房以降の復興計画はついに実らずして、今日に及んでいる。

現在は塔婆の巨大な心礎が旧位置に残り、水平位に残存しているものが三個ある。この他にも塔の礎石と思われるものが附近に數個散在している。この地はもと塔、金堂、講堂と鼎立する位置に基壇があつたことは想像に難くない。しかし、塔の焼亡の後は荒廢のままに残された。講堂、金堂は再度の復興でその度ごとに基壇も改めて築き直されている。近世になるとこの二つの基壇は連続して講堂（本堂とよばれるようになる）金堂（本堂に対し阿弥陀堂とばれる）の間が同じ高さに盛土された。また盛土によつて講堂の前庭も広められている。その盛土の採集地にはこの塔の基壇も採ばれたであろう。塔の附近が現在のように低く削りならされているのは、このような事情が考えられる。従つてこの際取り残された礎石の數例から創建当初の姿を考えねばならない。いま現位置に残っていると推測される四個の礎石について記述してみよ

配列は心礎を中心に四天柱礎四個、側柱礎一二個計一七個である。そのうち旧礎の姿を残すものと、その一部を止めるものを合せて計五個である。便宜上東西列を北より1〜4列とし、南北列を西よりA〜D列とすると表記のような配置のものごとりがあられる。

②号礎。心礎に近接して、上面が水平に据えられた礎石である。その上面は心礎の上平面より七〇糎ばかり低い。柱座は明瞭でないが、座の中央部が残されている。平坦面は広くなく、柱座の中心はほぼ推定出来る。柱座は径約四五糎（一尺五寸）ほどは推定出来るが、周縁は明瞭でない。

③号礎。2号礎の東に柱座の僅かにみられる水平位の礎石がある。西辺の方が割れて失われているが、根石が数個残っていて、旧態を知ることが出来る。この礎石と次の4号礎石の間は土堆があり、樹根が張っている。柱座表面の高さは心礎上面より七〇糎（弱）低い。柱座の上面は円形に近いが、周りは削去されている。自然の亀裂の結果かもわからない。

④号礎。東南の隅石と推定されるもの南北二米、東西一・四米程度のもので、1号、2号より大形であることが明らかである。根石と思われるものが残っている。この礎石の上面には方約六七糎（二尺）の台石があって、近世の石地藏立像がある。台座の石には「空也素心大姉」と刻してある。礎石上面は台座の下になってみられないが、上面は水平で2号礎とほぼ同じ高さである。柱座の有無は不明であるが、あったにしても座縁は明瞭でない。

⑤号礎。東北隅の礎石の位置に近く、礎石割り取りの残欠らしいものが横たわっている。この石の上面は割り取られて失われた部分にあたるようである。（現在の東南面）他の石が地盤上に根石を以て据っているのに、この石は底が地盤についていないので、すでに原位置を動いているものと思われる。但し礎石④号と対照の位置に根石らしい塊石四個があり、現在堆土上に生えた樹根に接して残っている。従ってこの横たえられた礎石は西北の隅石であろう。

以上心礎以下の残礎で根石と思われる塊石のレベルは、ほぼ同一水平面で、心礎表面より二米前後の低い位置にある。これらの事実によって、観世音寺の塔婆の平面復元案を求むれば、およそ次のようになる。

礎石 No.

①—②	中心距離	1.6 m=5.28尺……… A
②—③	中心距離	4.05m=13.4尺……… B
①—③	中心距離	3.05m=10.07尺 …… C

Aより四天柱間の距離すなわち側柱中の間の長さを計算すれば、

$$2\sqrt{528}=7.44\text{尺}\cdots\cdots D$$

側柱脇間は $B-D=13.4\text{尺}-7.44\text{尺}=5.96\text{尺}$ となる。

従って塔(初層)の一辺長は、

$$D+2E=19.36\text{尺}\cdots\cdots E \quad \text{となる。}$$

$$\text{因にCの検算は } C^2 = \left(\frac{E}{2}\right)^2 + \left(\frac{D}{2}\right)^2$$

以上①②③礎石相互の関係によって柱間の計算は出来たが、なお④の礎石が柱中心位置を満足させ、且つ⑤の付近にある数個の塊石が、西北隅石の根石という推定が首肯される位置にあることを知ることが出来る。ちなみにこれらの礎石と根石はすべて花崗岩で、他の大宰府関係の礎石と同一である。礎石間隔の推定を終り、次に方位の問題を検討する。

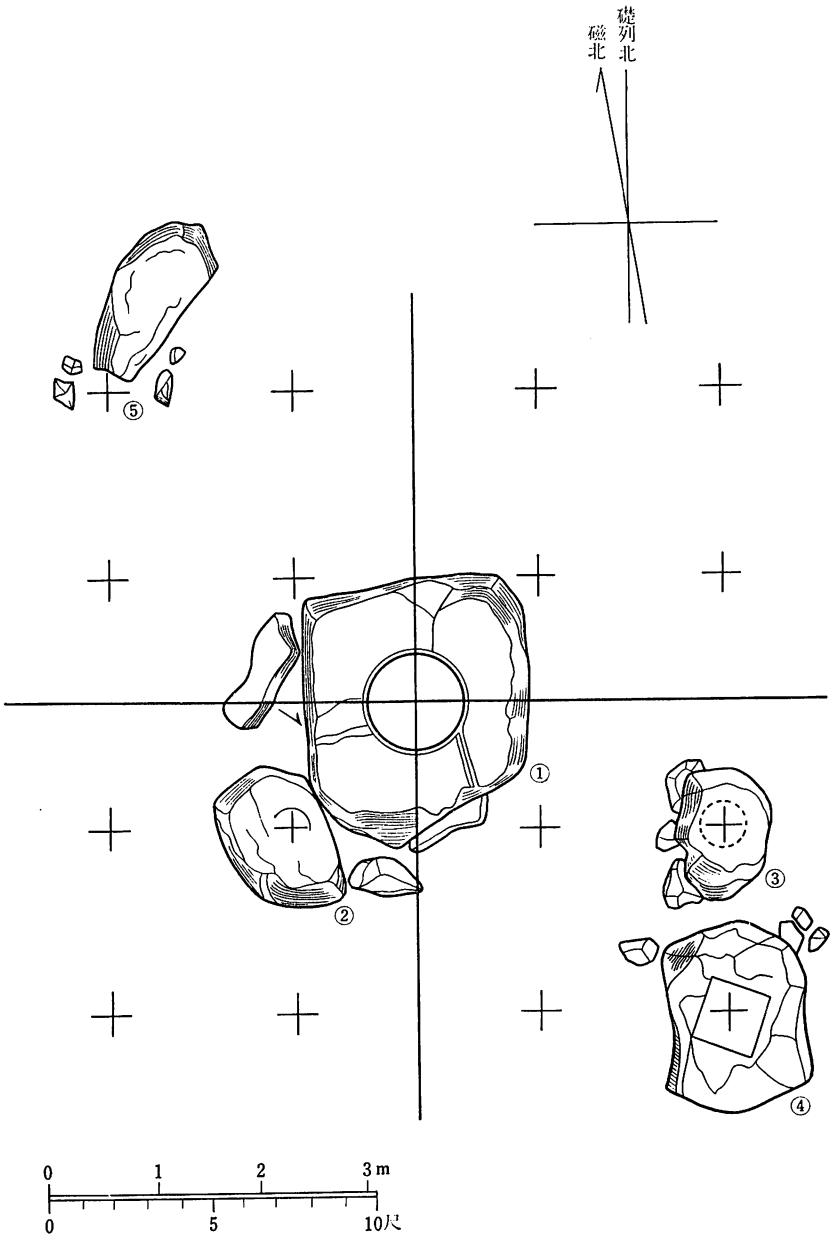
②—③の方位は磁北との差六・五度である。南北方向は磁北より六度東傾することになる。これは大宰府都府樓の礎石列で計った六度二〇分とほぼ一致する。ただし観世音寺講堂で計った磁針との差は五・六度であるから、この方位をとれば、柱礎の中心を移動させねばならない。しかし中心間隔の尺寸にまで影響するほどの差ではないから、柱間推定値を左のように記しておく。

中ノ間(四天柱間)	七・四四尺
脇ノ間	五・九六尺

完尺とすれば、唐尺で七・五尺と六尺で、単位尺は曲尺の〇・九九尺とされる。後者の尺が他の大宰府礎石群の計測から得られる単位尺に近いが、脇間は現曲尺に近くなる。仮に脇間を八尺とすれば、〇・九×三尺となって短小にすぎるかとも思う。しかし仮に八尺とすれば、塔の一辺は二〇尺となって、完数となる。一辺二〇尺前後の建物は、奈良時代の地方寺院にその例が多い。

近江兼盛寺 7+7+7=21
美濃弥勒寺 7+7+7=21

大宰府と観世音寺礎石について (鏡山)



九

第3図 観世音寺塔趾礎石群実測図

伯耆齋尾院寺	7 + 7 + 7 = 21
陸奥高崎院寺	7 + 7 + 7 = 21
下野新治院寺	6 + 6 + 6 = 18
豊前虚空藏寺	6 + 6 + 6 = 18

以上数値は尺

以上は側柱間隔が等間隔の例であるが、中ノ間の広い例は伊予石井院寺(5.8+6.2+5.8=17.8(尺))がある。脇間と中ノ間の対比は1対1・〇七弱でその比率は小差である。

畿内で建設年次の接近している諸寺院の例と対比すれば次の通りである。

	中ノ間	脇間	比率
法隆寺	2.68m	1.87m	1.49弱
元興寺	3.46m	3.3m	1.06強
四天王寺	2.68m	2.24m	1.19弱

観世音寺塔婆の中間と脇間との対比は、法隆寺と元興寺のほぼ中間にあるということが出来る。

次に礎石の高さについて検討しておかねばならない。まず基準面として心礎の上面を零として、四天王、側柱の遺存するものの上面は次の通りである。

高低差	cm	すなわち心礎は他の柱下面より七〇糎程度高い位置に据えられている。しかも礎石の下面はほぼ同一平面にするので、最初の基盤作りの際は特に心礎を掘り下げたことをしなかった。そして心礎が余りにも巨大な石を用いたために、他の礎石表面より七〇糎程度高くなってしまったようにみえる。もちろん、この基盤や基壇については発掘調査を終たものでないので、地固めの状態はよくわからない。
No. ①	± 0	
②	-71	
③	-67.4	
④	-71.1	

それにしても残存礎石はすべて根じめ石をもって、水平位に据えられているので、かつての柱礎であることは疑ないであ

ろう。

飛鳥—白鳳期の心礎で、心礎が地下に低く位置している場合が、数例知られている。観世音寺では反対に床面に露出している。果して露出していたかどうかは、少くとも延喜の頃資財帳にこれを確定する記述はない。法隆寺の場合は礎石は地下にあるが、四天柱間には須弥山の築造構成があつて、多くの塑像が配置される。しかしこれも創造当初の姿でなかつたようで、多く参考とならない。観世音寺では心礎の石があまりにも大きくして、四天柱も心礎に接して、柱も心礎の隅にぎりぎり余裕なく立っていたようである。

最後に観世音寺の塔が五層であることは諸記録にしばしば見られることなので、遺跡の上からもそれに適合した数値が出ねばならない。塔の層数は心柱の径と初層の一辺長の対比によって決定される。観世音寺の場合一辺長を二〇〇尺として、心柱径二・五尺であるから、八倍である。石田茂作氏は、この対比七乃至八を五重塔に、九乃至一〇を三重塔に比定されている。五重塔の対比数値の近似例は、次のようなものがあげられる。

元興寺五重塔三二・五尺／三・七五尺Ⅱ八・六　醍醐寺五重塔二一・九尺／二・七五尺Ⅱ七・九六

以上観世音寺に現存する礎石群から一応の平面プランの復元案を示したが、塔趾周辺に散在する礎石群について一言してこおう。前に私はこの塔趾の西南部にある数個の礎石は塔の礎石であろうと記した。けれども、これまであげた②④の礎石と柱座の状態ではうかがえない状態を注意しておきたい。すなわち散在礎石のうち、四個は明瞭な円形柱座のくり出しがあり、一個は地覆座をくり出している。若しこの礎石が塔趾のものであれば、延喜資財帳にある戸四具の扉敷として都合がよい。それが扉の一端に据えられるとしたら、当然礎石③にも同じ構造があつてもよさそうであるが、前記のように座縁が明かでないので地覆座は見当らない。なお資財帳には塔物章に漆壺などの記載があるが、後考にゆずることとして、ここには礎石の記述だけに止める。

注(1) 五重塔の火災については、左記の記録がある。

大宰府と観世音寺礎石について（鏡山）

不空羅索観世音木彫立像（観世音寺収蔵庫安置）胎内銘に、「此像者去康平七年五月寺家有火、堂塔廻廊僧房炎上之時、全逃猛煙之底」（下略）とあり、胎内より発見された塑像心木の墨書にも、「去康平七年五月燒失之時不燒御身木也」という句がある。

**On the Base Stones of *Dazaiju* (大宰府)
and Temple *Kanzeonji***

Takeshi KAGAMIYAMA

The base stones of *Tofurō* (都府樓 Office of *Dazaiju*) have been thought the works of the seventh century. But the excavations of last year taught that the base stones of *Tofurō* on the surface of earth were not of the seventh century but of *Heian* (平安) period. Previously to these excavation it came under my notice that the base stones of *Chūmon* (中門 the Middle Entrance of Office) had the column-bases which were not exactly round. The works of *Nara* (奈良) period have the exactly round column-bases. If these base stones were roughly manufactured, it might suggest not only the spiritual decline of stone-masons but also the decline of general art of shaping. The base stones of *Tofurō* on the surface of earth might have been manufactured in the previous period to the date in which they were used. To clarify these questions we must compare those base stones with the base stones discovered now under the surface of earth. We expect to be able to solve the problems through further excavations, especially of East and West office buildings.